



子どもの豊かな感性・協調性を育む 自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2014

実施レポート



日 程 2014年7月14日(月)～20日(日)
視察地 ドイツ バイエルン州
参加者 22名

環境教育が盛んなバイエルン州を訪れ、バイエルン州自然保護景観管理アカデミーや自然豊かな園庭を持つ幼稚園・保育所など8カ所を視察してきました。

乳幼児期における自然とのふれあいは、豊かな感性や協調性を育みます。小さい頃からの日常的な自然とのふれあいが大切と考えているドイツでは、「園庭ビオトープ」を設置する幼稚園・保育所が増えています。今回は、そういった取り組みが、近年、国際社会で求められている「持続可能な開発のための教育（ESD）」の観点からも評価されている園も訪れました。



視察企画：(公財) 日本生態系協会

後 援：(社福) 日本保育協会、(公社) 全国私立保育園連盟、
(NPO法人) 全国認定こども園協会、ドイツ連邦共和国大使館、
日本ビオトープ管理士会

協 力：(株) ジャクエツ、(株) チャイルド本社、ひかりのくに(株)、(株) メイト



自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2014 訪問先

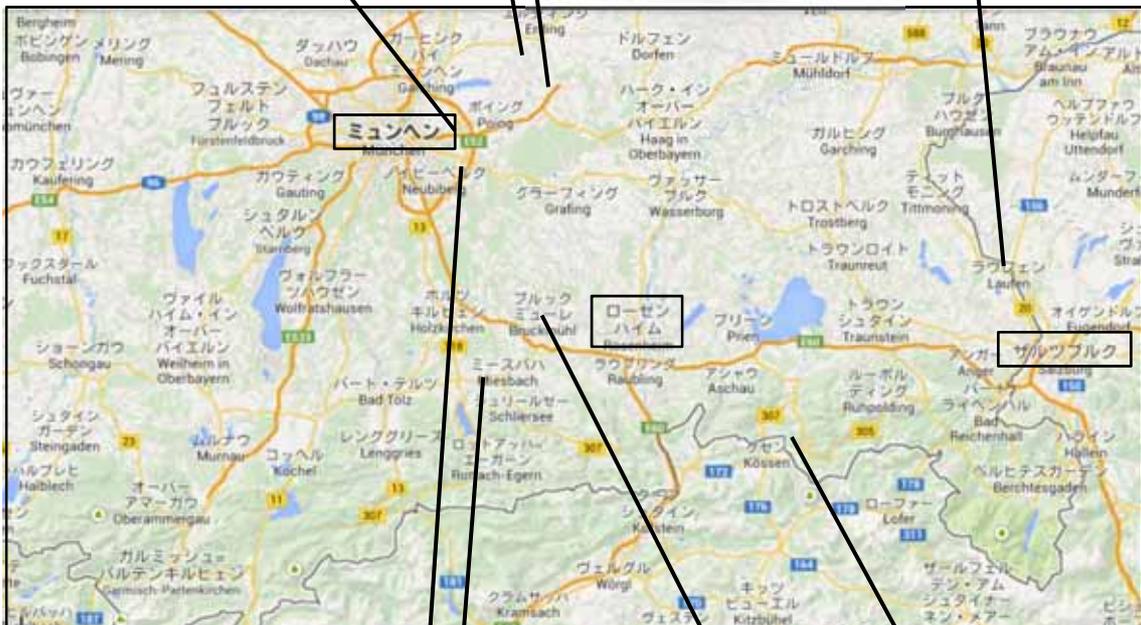
- | | |
|---------------------------------------|------|
| 1. バイエルン州自然保護景観管理アカデミー
(7月15日午前) | P 3 |
| 2. カソリック幼稚園セント・パンクラティウス
(7月16日午前) | P 5 |
| 3. ミースバッハ・カソリック教会プファー幼稚園
(7月16日午後) | P 7 |
| 4. マングファル森と自然の幼稚園
(7月17日午前) | P 9 |
| 5. 自然の子セント・ジョージ幼稚園・保育所
(7月17日午後) | P 11 |
| 6. オットーブルナー通り 107 保育所
(7月17日午後) | P 13 |
| 7. 自然景観設計士ヴィット博士の模範園
(7月18日午前) | P 15 |
| 8. セント・マーティン幼稚園
(7月18日午前) | P 17 |



自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2014 訪問地の位置



- 6. オットー・ブルナー通り 107 保育所
- 8. セント・マーティン幼稚園
- 7. ヴィット博士の模範園
- 1. 自然保護景観管理アカデミー



- 5. 自然の子セント・ジョージ幼稚園・保育所
- 3. ミースバッハ・カソリック教会プファー幼稚園
- 4. マングファル森と自然の幼稚園
- 2. カソリック幼稚園セント・バンクラティウス



バイエルン州自然保護景観管理アカデミー

「園庭は子どもたちのエネルギーの源」

バイエルン州自然保護景観管理アカデミーは、州の環境・消費者保護省に属する研究機関です。自然教育に関する研究や普及、市民教育を手がけています。保育者・教育者向けの研修や雑誌の発行も行っています。2011年には、自然豊かな園庭や校庭づくりと活用に関する「五感を使った遊び場のこれから」という会議を行い、州内の園や学校関係者など100名以上が参加しました。



アカデミーでは、所長のパシュ氏、自然教育の専門家のケストラー氏より、幼稚園・保育所の園庭に自然の要素を取り入れることの大切さについて、映像を使った講義を受けた後、自然体験のための「自然教育・研究ステーション」にて野外研修を受けました。

ステーションの敷地には18haにおよぶ草原や森があります。そこで、視察グループも自然とのふれあい方、様々な生きものの見つけ方などを楽しく学び、自然のなかで遊ぶことで、喜びや驚きなど様々な感情が生まれることを実体験することができました。

「水辺などの自然に身を置くと、人は知らず知らずのうちに、水や空の色、草の感触や香り、せせらぎの音、鳥や虫の声などいろいろなことを感じます。自然豊かな園庭も同様に、子どもたちの五感により刺激を与えます。様々な遊びを通じて子どもたちは、社会性、抵抗力、物事を解決する力、創造性、自制心なども身につけていきます。園庭は、子どもたちのエネルギーの源、生き活きとした毎日を送るための大切な場所です。」





各自に色鉛筆が渡され、それと同じ色の植物を探しました



アカデミーを訪れた思い出に、草原で積んだ花で押し花をつくりました

「船を作りたいなら、森に行って木を集めたり、作業を割り当てたりするのではなく、果てしなく広い海への憧れを教えよ」

アカデミーの所長が引用したサン・テグジュペリの言葉は、自然への憧憬をいただくことの大切さを教えてくれました。





カソリック幼稚園セント・パンクラティウス

「卒園生も頻繁に遊びに来る自然豊かな園庭」

この幼稚園の園庭は約 1,000 m²の広さがあります。しかし、かつては芝生に覆われた、平坦で遊びの要素に乏しいものでした。そこで 10 年前、自然豊かな園庭への改造に踏み切りました。設計は自然景観設計士のヴィット博士に依頼しました。新しい園庭づくりは、まず、子どもたちの望みを聞くことから始めました。保護者の意見を十分に取り入れ、多くのボランティアの協力を得て、自然豊かな現在の園庭ができあがりしました。150 種以上の地域在来の草木が生える園づくりには村人の半数近くが携わったということです。



毎日の生活のなかで自然とふれあうことは、子どもたちの心身の発達や人格形成にとっても大切です。時間とお金をかけて遠出しなくても、園庭を自然豊かに改善することでそれが可能になります。保護者は園庭ビオトープで遊ぶことで、子どもたちが優しく穏やかになることを実感しているそうです。

石積みの割れ目にもたくさんの生きものがくらしています。



自由にもいで食べられる実のなる木やハーブも植えてあります。

子どもは石の感触が大好きです。崖に登ったり飛び降りたりするための岩場もあります。自然豊かな園庭では、毎日の遊びのなかで自然にバランス感覚も養われます。自然界のルールや、危険な場所ややってはいけないことを子どもたちはよく理解しているため、園庭で大きなケガをする子はいません。



地域の方が作ってくれた、枝を使った昔ながらの柵も子どもたちに人気です。

園庭ビオトープの手入れや管理には、保護者や地域のボランティアが喜んで手を貸してくれます。そうした作業が地域の人々の絆を深めることにもつながっているそうです。自然豊かな園庭の魅力に誘われて、子どもたちは卒園してからも、頻りに遊びに来てくれるそうです。





ミースバッハ・カソリック教会プファア幼稚園

「ふれるものすべてが子どもを育てる」

プファア幼稚園は、子どもたちに積極的に外遊びをしてほしい、自然とふれあってほしいという思いから、2008年に自然体験ができる空間へと園庭をつくり変えました。

この園はミースバッハで最も歴史が古く、町の多くの人がこの園で幼い頃を過ごしました。そのことから、園庭の改造が行われた際には、子どもの保護者だけでなく、この園に特別な思いを寄せるたくさんの人々が、ボランティアとして作業に参加してくれたそうです。



自然体験ができる園庭づくりから6年経った現在、小高く盛った山の上や斜面には、地域在来のたくさんの草花が繁茂していました。使い込まれたトンネル、大きな岩の階段や壁など、様々な自然の要素を取り入れる工夫がされていました。それらに直にふれることで、子どもたちはいろいろなことを学ぶそうです。園庭は、子どもたちの創造性豊かな遊び場であると同時に、昆虫など小さな生きものたちがくらす空間でもありました。

低木で作ったティピーや迷路は、心躍る隠れ家になったり、時には子どもたちを空想の世界へと誘う場所にもなるそうです。



土、草、コケ、砂利、丸石などの自然の素材を素足や素手で感じ五感を刺激する小道もあり、視察グループも裸足で踏んで、その感触を楽しみました。



園庭に昔から生えている大きな木が、気持ちのよい木陰を提供してくれました。



この園庭に対する子どもたちや保護者からの予想以上の反響を受けて、教会は市内の別の場所で運営する施設の園庭もつくりかえました。近くなので是非ということで、そちらも拝見させていただきました。



マングファル森と自然の幼稚園

「森には無限の遊びの可能性がある」

森の自然にふれさせながら子どもを育てたいと願う保護者が集まって、2002年に設立されたこの森の幼稚園では、「森」というより、むしろ「山の斜面」のような場所で子どもたちを遊ばせていました。子どもたちは雨や雪などの悪天候にかかわらず、四季折々の森の自然と向き合って過ごします。自然を相手にすることで、忍耐力や思いやり、協力の精神など社会性が身につくと同時に、命の大切さを知り、自然を愛する心が育つといいます。また、自らの能力の限界と可能性も認識できるようになるため、大きなケガをしたり、迷子になることもないそうです。



朝集合すると、まずその日に何をやるかを子どもたちがみんなで考えて決めます。太陽の踊りで元気が出たら、どこでも座れるシートと飲み物とスナックが入ったリュックを背負って出発します。小さくても自分の荷物は自分で運びます。

グループが途中で2つに分かれました。ひとつは前日の雨でぬかるんだ森の道に行くグループ。



もうひとつのグループは、森の中で木を切ったり、削ったりすることにしました。子どもたちは、ナイフやのみなどの道具も上手に使いこなしていました。



やがて、泥んこ道グループも合流して、山の斜面を登ったり降りたりし始めました。危ない場所では、年長の子どもが自発的に小さい子に手を貸していました。

森の幼稚園の子どもたちの間には喧嘩はありません。理由には、興味の対象がたくさんある、譲りあいができる、そして必ず仲裁者が現れるなどが挙げられます。



子どもたちの遊ぶ様子を見て、「森には無限の遊びの可能性があり」という園の代表者の方の言葉を実感することができました。



一緒に過ごした楽しい時間のお礼に、「げんこつ山のたぬきさん」を合唱しました。





自然の子セント・ジョージ幼稚園・保育所

「自然は6歳までに学ぶことが大切」

園長のリンディガー氏は、自然のことは6歳までに学ぶことが大切だと言います。乳幼児期からの自然とのふれあいの重要性を強く認識し、そうした園づくりの普及に力を入れています。この考えを体現した園庭ビオトープには、地域在来の草花や木々が生え、木の実がなり、チョウやミツバチのための草原やハリネズミのための茂み、カエルやトンボのための池などがあります。



元来、自然は人工的に整頓されたものではないので、園庭もあるがままの状態を保つようにしています。石や丸太が転がっていても子どもたちが大きなケガをすることはなく、地面の高低差によってかえって注意深さが養われるそうです。

園庭には、たくさんの遊びの要素があります。「バームハウス」(木の家)は子どもたちに人気のスポットです。一人になりたい時やままごとなどでよく使われます。砂場は奥の井戸から水を流すと水辺に早変わりします。



訪れる虫の好みに合わせて、「虫のホテル」も多種多様に用意しています。



パンやソーセージを焼くたき火のコーナーと歌やお話を楽しむ円形劇場も、五感を楽しく刺激してくれます。



かつてこの地域にコウノトリが生息していたことの象徴として、園舎の屋上にはコウノトリのデコイが置いてあります。

また、園庭をさらに自然豊かにする目的で、現在、水辺をつくるための拡張工事が進行中です。



「自然の中で五感を使って遊ぶことで知覚機能が発達し、想像力、判断力、応用力が養われ、リスクへの対処もできるようになる。同時に自然に対する敬意や自然を守ろうとする責任感も生まれる。」そんな思いでつくられた園庭ビオトープは、2011年にE S Dの「緑豊かな遊び場賞」を受賞しています。

当日は、市長も歓迎のために同席してくださり、地域ぐるみの取り組み様子がうかがえました。



オットーブルナー通り 107 保育所

「草花や生きものは土壌が支えています」

この保育所は、大通りに囲まれた市街地の一角にあります。しかし、敷地内はそれを感じさせない緑豊かなオアシスのような空間が広がっています。園には 18 の異なる国からの子どもたちが通っており、それぞれの文化や言葉を互いに学びあっています。



多様な草花や生きものなどの自然は土壌が支えています。このことから、この保育所では、コンクリートで囲まれた都市部で暮らす子どもたちに、土や自然の大切さを身近に感じてもらうための 2 つのプロジェクトを実行しています。

一つは、「五感を使った自然体験と持続可能な発展のための保育」プロジェクトです。週に一度森に出かけて、木の枝や葉っぱ、木の実、花びら、石など自然の材料を集め、園に持ち帰ります。これらの材料を敷きつめた道をつくり、その上を裸足で歩き、素手で触れ、匂いを嗅ぎ、音を聞くなどして自然を体感します。その後、工作の材料として使います。



もう一つは、「プリンセスの庭」プロジェクト。地域在来の草花や、野菜、ハーブをプランターに植えて、有機栽培で育てるというものです。育った野菜はみんなで食べます。みんなで持ち寄ったりリサイクル材料などをプランターとして使います。草花や野菜の世話は子どもたちが行います。子どもたちをできるだけ土にふれさせるためのアイデアですが、地域在来の植物に親しむことや食物連鎖、地産地消の精神を学ぶ機会にもなっています。



都会での暮らしのなかに自然とのつながりを取り入れる活動が高く評価され、ユネスコの持続可能な開発のための教育（ESD）賞を授賞しています。



園で収穫された野菜を使ったスナック、ハーブ入りの手作りバター、ハーブティなどで、おもてなしをしていただきました。



子どもたちは、事前に日本の文化や食べ物、言葉についても学ぶなどして、日本からの来訪者を大歓迎してくれました。



ヴィット博士の模範園

「工夫一つで狭い場所も多様性豊かな園庭に」

自然景観設計士のヴィット博士は、生物学の専門家でもあります。自然体験のできる遊び場を増やすために、これまで多くの園庭や校庭、公園などの設計・指導に携わってきました。博士のご自宅の庭は約 5,000 m²の広さがあります。しかし購入当時は、真っ平らで外来植物がはびこっていて、自然体験のできる庭とはほど遠いものだったそうです。それを地域在来の植物を植え、地形に起伏を持たせ、池を掘り、多様性に富んだ庭につくり直しました。現在は約 700 種の植物が育つ自然豊かな庭づくりの模範園として機能しています。



博士は、工夫一つで狭い場所も多様性豊かな園庭にすることができると思います。自然豊かな庭づくりの重要なポイントとして、以下の 4 つを挙げています。

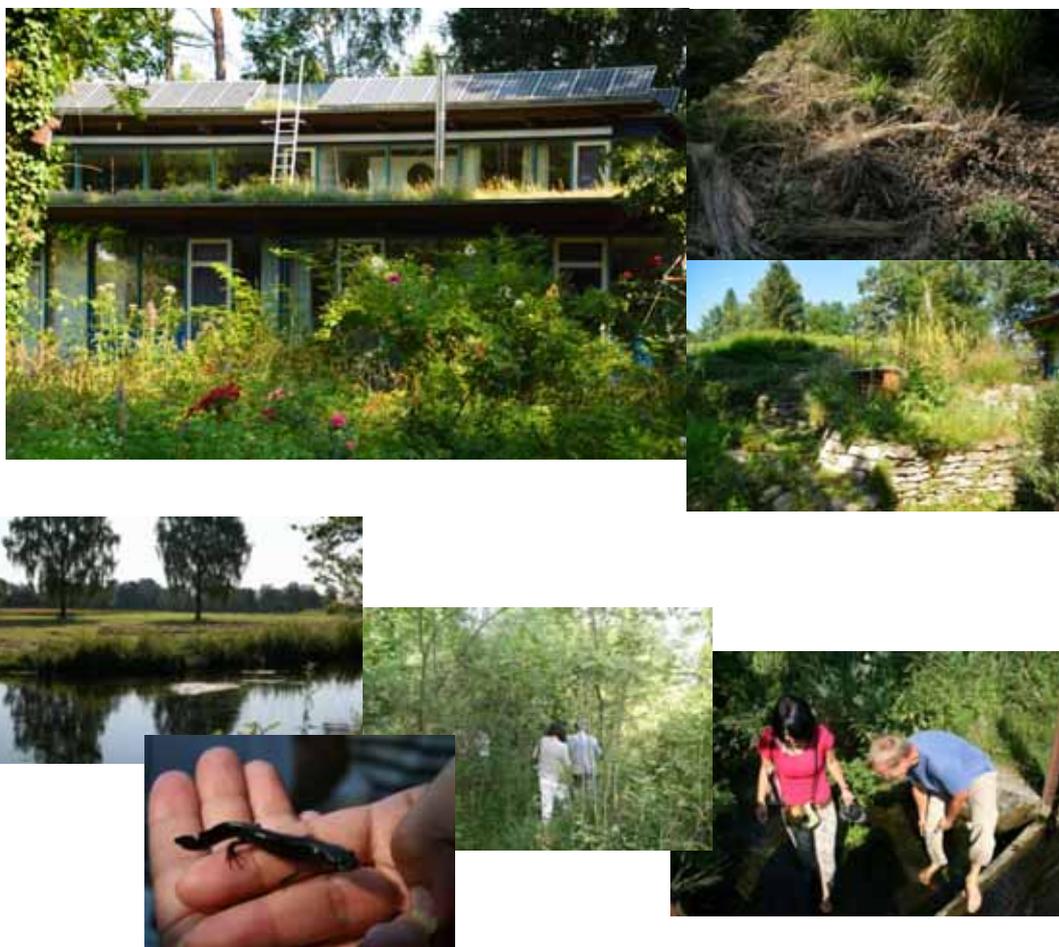
1. 地域在来の植物、2. 生育環境の多様性、3. 立体的な構成、4. 手入れと管理

1. 地域在来の植物を植えることで、自然環境の保護に貢献できるうえ、手入れを簡素化できて管理コストも大幅に節約できます。

2. 狭い敷地でも工夫して多様な植物が育つ環境をつくるのが大切です。湿地、日陰、半日陰、日当りのよい場所、貧栄養と富栄養な環境、石積みの隙間、屋上緑化等。それぞれの環境に違った植物が育ち、それを好む動物が訪れて、生物の多様性が豊かになります。

3. 立体的な構造は重要で、たとえ 5cm の段差でもそうした環境を好む植物が存在します。丘や壁を作ることも重要です。また、昆虫のすみかとなるので、倒木を放置しておくことも大切です。

4. 多様性を持たせるため、刈り取った木や草をそのまま残す場所と取り除く場所の両方の環境を残す必要があります。自然の庭は管理の手間を大幅に省くことができます。園芸種による庭園などと比べると30分の1になるということです。



視察の最後に、木々の間の道なき道をかき分けて水辺にたどり着きました。足を這い上がる蟻と戦いながら入った水の冷たさに新鮮な感動を覚えました。土、水、風、太陽、草、虫…、まさに、自然の中で五感を刺激される体験となりました。





セント・マーティン幼稚園

「地域の自然を愛することが地域の文化を大切にする心を育む」

セント・マーティン幼稚園は自治体が運営する幼稚園です。芝生と砂場だけの殺風景だった園庭を、自治体の補助金と保護者などからの寄付金で改善しました。維持管理には、約30人の保護者が協力してくれています。

2,000 m²の敷地には、小山や迷路、トンネル、大きな倒木などがあります。この自然と融合した園庭の計画づくりは、子どもたちがアイデアを持ち寄って行ったそうです。それを基に保護者や多くのボランティアが加わって、模型や庭づくりの作業が進められました。



園内のいたるところに、食べられる実やいい香りのする草花があり、四季折々の楽しみを与えてくれます。「虫のホテル」を利用する虫たちも季節によって様変わりします。



当初子どもたちのお気に入りだったヤナギのトンネルは、成長の速いヘーゼルナッツの木が日陰を作るため、日照不足でヤナギが枯れて壊れてしまいました。今はそこにブナの木が生えてきています。植物が枯れることは自然でもよくあります。この園でも手を加えることはせず、自然に別の木が生えてくるのにまかせています。



園では、子どもたちに、この地域に本来生えている在来の草花や木々の大切さを教えています。それは、自分たちが生まれ育った地域の自然を愛することが地域の文化を大切に育てる心を育むからです。

自然に対して愛情をもつ人間を育てることが、幼稚園の役割の一つと考えているそうです。

視察グループを歓迎するため、市長も駆けつけてくださいました。ボランティアの一人として園づくりに携わったことをとっても誇りに感じているようでした。





私たちの協会では、今後も、自然と文化が共存する美しいまちづくりのシンクタンクとして、自然を活かした保育・幼児教育の充実を支援してまいります。研修会の講師派遣、自然を活かした園づくりのコーディネート、そして個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望に応じて対応いたします。お気軽にご相談ください。